

ホテルマン冥利に尽きる、 心に残ったお客様

株式会社帝国ホテル 代表取締役会長 小林 哲也



1945年6月生まれ 69年慶応義塾大学法学部卒業後、帝国ホテル入社。フロント、宿泊予約、営業企画、人事、営業などを経て、89年セールス部長、92年宿泊部長、98年取締役総合企画室長、2000年帝国ホテル東京総支配人、2004年代表取締役社長、2013年4月に代表取締役会長に就任し、現在に至る。一般社団法人日本ホテル協会会長も務める。趣味はカントリーミュージックを仲間と演奏すること。

私は一九六九年に帝国ホテルに入社しました。学生時代、いろいろな本と出会い、人間というものに興味を持っていました。そしてできるだけ多くの人と素適な関わり合いを持てる職に就きたいと考え、ホテル業を選んだのです。以来四七年間、帝国ホテル一筋に勤めております。帝国ホテルが一八九〇年に開業してから今年で一二六年目ですから、その三分の一の歴史を見届け、また、私の人生の三分の二を帝国ホテルとともに歩んできたことになりました。これまで数々の感動的で素晴らしい出会いがありました。その中でもとっておきのエピソードを一つご紹介します。

一九二九年にツエッペリン伯号という飛行船が東京上空に飛来しました。それは長さ二二六m、最大胴幅三五mのとて巨大な物体です。ボーイング七四七の三倍以上の長さがあります。ツエッペリン伯爵が創業したドイツの会社がこれを造り、アメリカの新聞王といわれたハースト家がスポンサーをして、アメリカからスタートしてドイツへ、ドイツから東

京、東京からロサンゼルスに行くという行程で、二八八時間一分という世界一周の記録を作ったのです。帝国ホテルはその一行の宿舎となっただけではなく、最後の飛行行程である東京・ロサンゼルス六日間の機内食供給も担当しました。当時のメニューが今でも残っています。メニューカバーは浮世絵風で、富士山の上をツエッペリン号が飛んでいて、山河の景色を挟んでその下に帝国ホテルが描かれており、なかなか洒落たデザインです。

さて、それから六〇年たった一九八九年、営業部長をしていた私宛てに、旧知の日本航空のフランクフルト支店長から電話がありました。「小林さん、今からちょうど六〇年前にツエッペリン伯号という飛行船が東京に来て乗客乗員が帝国ホテルに泊まった事実をご存じですか?」「勿論です」「当時のクルー二人とツエッペリン伯爵の孫娘が、もう一度東京の帝国ホテルに泊まりたいと言っています。ご興味があればチケットを三枚差し上げます」とおっしゃるのです。私は即答して

チケットをいただきました。翌一九九〇年は帝国ホテルが開業一〇〇周年を迎える年でしたので、諸々のイベントを発表する記者会見の際に、三人をお招きしてメディアにご紹介しました。また、三人には当時の機内食メニューを再現して召し上がっていただきました。クルーの一人は当時一六歳ぐらいでしたが、一九八九年一月二三日付の日本経済新聞の文化欄に、当時の思い出と六〇年経ち再来した感動を文章にして寄せられています。

六〇年前にお迎えしたお客さまを、人間や建物は違えど、時を経てまた私どもがお迎えしたということ。少なくとも六〇年以上ホテル業をしていなければこういうことは起きないわけで、歴史の深さを感じるとともに、まさにホテルマン冥利に尽きる経験のひとつでした。私は、人間が好きです。そして、世の中を動かしているのは人間です。生まれてから死ぬまで、素敵な出会いをどれだけ重ねられるかが人生の醍醐味だと信じて止みません。



次号は、外立総合法律事務所長・弁護士の外立憲治氏にお願いいたします。

※本コーナーは、弊会ホームページでもご覧いただけます。